
非常識な日常の始まり

れみい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非常識な日常の始まり

【Nコード】

N7696G

【作者名】

れみい

【あらすじ】

いつも通り部屋に帰り寝ていたキョンに起きた異変。俺は女になっちゃったのか・・・！？性転換設定での二次創作ストーリーの始まり。

性転換ネタ。(前書き)

この小説は二次創作です。

つまり私の妄想を書きつづっているものです。

そういうのが嫌な方はBACKを押してください。

私はあまり小説に詳しくありませんし、日本語もおかしいところが多々あると思います。

ご指摘などしていただくと、ありがたいです。

性転換ネタ。

「んー・・・」

———目が覚めた。

俺は意味もなく辺りを見回した。

相変わらず殺風景な俺の部屋が見える。

洋服タンスの横にはいつも着ていたセーラー服。

「・・・？」

そうそうセーラー服、っておい！

いつもの場所に適当に吊るしておいた俺の制服が

真新しい北高のセーラー服に変わってやがる。

「これは夢だ、悪い夢だ。」

「・・・？」

俺、こんな声だっけ・・・。

突然嫌な予感がして、パジャマのまま洗面台へ走った。

気のせいかとても息が切れる。

そして洗面台にたどりつき鏡を見ると

そこには長髪の女の子が映っていた。

「・・・！？」

訳が分からない、夢だ、夢に違いない。

「キョンくーん？」

可愛いイントネーションで妹が声をかけてきた。

だがおかしい、そんな声だったかな・・・。

「ん？」

と振り向くと、

そこには、妹の面影のある可愛らしい少年がいた。

髪は短くなっていた。短いと言っても前と比べてだが、

そこそこ長かった妹の髪は、肩の位置までになっていた。

「な、なあ、髪 切ったのか？」

オロオロしながら聞くと妹は

「えー？ボクもとからこんなのだよー？」

僕？僕ってなんだ、というかなんなんだこの現状！

「今朝はいつもより早起きだねキョんくん☆」

「お兄ちゃんと呼びなさい、お兄ちゃんと。」

「・・・ほえー？」

ん・・・、なんだその反応は、何かおかしかったか？

「キョンくん何言ってるのー？キョンくんはお姉ちゃんでしょう？」

とうとう俺は妹にお姉ちゃんと呼ばれてしまった・・・。

お兄ちゃんと呼ばれないままお姉ちゃんか・・・、って！

問題はそこじゃないだろう。俺がお姉ちゃん！？そんなわけねえ！

改めて鏡を見ると、そこにはやや気だるい雰囲気の子が映る。

「まじ・・・かよ・・・。」

いったん部屋に戻った俺はベッドに座りこんだ。

「落ちつけ、俺。考えれば何か思い当たるはずだ・・・。」

さてよ、この非常識さ、思い当たるといえば・・・。

————あいつしかいねえ・・・。

頭に浮かんだ人物はまぎれもなく、鈴宮ハルヒコであった！

・・・ん？

何で俺今、ハルヒコって言ったんだ？

まあいいか。

ふとカレンダーが視界に入る。

「ふむ、今日は月曜日か。」

・・・って、4月!?

何で4月なんだ？俺は高1の終わりをエンジョイしてたんじゃないのか？

「キョンくん、早くしないと遅刻するよー？」

現在時刻6時50分。

まずい、とにかく早く用意せねば。

とりあえずセーラー服を手にとっていろいろなプライドを振り払い着てみることにした。

「・・・あれ？」

何故かすんなり着れた。

言っておくが俺に女装癖は無いし、別にセーラー服に詳しい訳でもない。

いとも簡単に着れてしまった。

そんなことを気にしてる暇もなく、急いでリビングに向かう。

俺がついたと同時にトーストが焼き上がり、定番の音と立て機械から飛び出る。

「早く食べよーキョンくーん☆」

俺はトーストを皿に乗せ、少し大き目のテーブルへと向かう。

「ジャムージャムー、きょううっはジャムー☆」

即席の歌を歌いながら陽気な妹？がジャムを取ってくる。

俺はというと、そんな気分にもなれずそのまま食べることにする。

———妹（？）よ、加減というものを知っているか・・・。

妹はパンにジャムを塗る。というよりたくさんのジャムにパンを乗せた

ようなくらのパンを手に取り、おいしそうに食べていた。

いかん、見てるだけで胸やけがしてくる・・・。

さっさと食べてしまおう。

と、思っているのだが。

なかなかなくなるらない。

いつもはもう食べ終わってるくらいの感覚なのだが・・・。

どうやら、認めたくないが女体化してしまったこの体は口が大きくないらしい。

3分の2も食べてないのにお腹もいっぱいになってきた。

仕方ないので仏様に謝りパンを残し、洗面台で妹・・・いや、弟と

一緒に顔を洗い、学校に行くことにした。

玄関を開けてやると、元気いっぱいのやはり可愛らしい声で

「いってきまあいす☆」

と、弟が走っていく。

俺も急がねばと、自転車のペダルを勢いよく踏み続ける。

自転車はあまり疲れないと認識していたのだが・・・、どうも

500メートルあたりで息が切れてしまう。

「体力もないのかこの身体は・・・。」

何とか駅に着き、満員電車にも負けないであろう混雑状態の自転車
小屋

に何とか自転車を止め、いつもより一本遅れた電車に乗り込む。

「はぁー、何とか間に合った。」

15分くらいで到着した電車からサラリーマンらしきおっさんの波に乗って、俺は電車を降り、いそいそと学校を目指した。

学校に来るたびに思うよ、この坂はなんだ……。

陸上部の長距離走者でもへとへとになるであろうこの学校まで延々と延びる

坂がなければ、少しはマシだろうに。

その坂をとぼとぼと歩いていると、

「おはよう、キョン子ちゃん」

と、声をかけられる。

振り向くと、そこにはとても可愛らしい、どこか国木田に似た女子生徒がいた。

というか……、国木田だろう、たぶん。

「お、おはよう……。国木田？」

「そうだけど。どうしたのキョン子ちゃん？」

「ああいや、なんでもない……。」「

どうやら国木田らしい。

国木田とは中学が一緒だった俺の友達である。

他にも同じ中学のやつが受かった気がするが、面識がないから気にしない。

というか国木田、キョン子ちゃんってなんだ。

この身体になっても俺はキョンなのか。

「緊張するね、入学式。」

入学式・・・？

カレンダーの4月ってまさか、入学式まで戻ってしまっているのか！？

涼宮・・・何がしたいんだよお前・・・。

「ああ、そ、そうだな・・・。」

学校についてからというもの、間違えて自分のもとの席(?)に座ろうとして

しまうわ、まだ俺と面識のない谷口らしきうるさい女性に話しかけてしまうわで

大変だった。

—————入学式が始まったー。

なんていうのだろうか、二度も入学式を受けると、なんだかとてもイライラする。

基本的に無駄なんじゃないかという行事が多すぎるんだ・・・。

やっこの思いで入学式が終わり、配属された1ー5へ足を運ぶ。

「どうせ席は出席順だろうなー。」

と、俺は黒板に張りだされた座席表を見ることがもなく席についた。

国木田が、

「どうして分かったの？自分の席。」

と聞くもんだから、

「んー、勘だよ。」

なんて売れない手品師のようなことを言ってしまった。

国木田の頭にハテナマークがついているなか、担任の岡部が教室に入ってきた。

「えー、わたしがこのクラスを受け持つ、岡部です。」

何故だ。何故岡部は男のままなんだ。

そのあと岡部は自己紹介をしたのだが、その最中に

バンツ！

勢いよくドアが開いた。

長髪で紙を黄色のリボンで結んでいるどえらい美少年がそこにいた。

岡部が怒った口調で

「おいお前。涼宮だな。どうして遅刻したんだ。」

と聞いた。

「・・・入学式が終わった後、校内の不思議を聞いて回っていました。」

ハルヒコだ、間違いない。

何故ハルヒコと呼んでいるかはもう気にならなくなった。

一同が啞然としている中、涼宮は俺の後ろに座る。

岡部がわざとらしく一度咳をし、自己紹介を再開した。

正直聞き飽きたよ・・・、二回目だけど。

「では皆に自己紹介をしてもらう」

出席順にやや冗談の入った自己紹介が開始され、教室の空気が上下しながら

俺の番がやってきた。

俺は男の時に一度言った短い紹介文を淡々と読み上げ、気だるそうに座った。

そしてお出まし。

もう驚くことはないだろうと思っていたが、以外に驚いてしまった。

「東中出身、涼宮ハルヒコ。ただの人間には興味はねえ、この中に宇宙人、未来人、超能力者がいたら、俺のところに来い。以上。」

相変わらず凄まじい自己紹介だ。

固まったクラスを立て直そうとしたのか、谷口（確定）が自己紹介をし、クラスの

空気が盛り上がる。

この世界の谷口はどうやら言ってることは前よりましいらしい。

全員の自己紹介が終わり、10分くらいの休み時間が訪れる。

俺はというと、初日にハルヒコ話しかけるのも何だからしばらく様子を見ることに

した。

どうでもよかったので言わなかったが、席替えの結果は予想通り窓際後方2番目で

ハルヒの前というありがたくない席になった。

予想はしてたがとても残念だ・・・。

机に頬杖をして窓の外を眺めていると、国木田が谷口を連れてきた。

「ねーねー、キョン子ちゃん」

お前が言うな谷口。

「そ、そんな睨まないでよおー。」

いかん、谷口が可愛く見える。

「私と友達にならない？」

「俺とか？」

口が滑ってしまったが、まあ一人称が俺でも別によからう。

「そう！っていうか一人称変わってるねーw」

「中学の時に、キョン子ちゃん荒れててね、友達いなかったんだけど、皆で話し

かけてみたらけっこう話せたの。」

「それでね、しゃべり方が男みたいだから一人称男にしたら？っていう提案が出てー。」

「それに至るわけね？」

「そうそうw」

分かりにくいだろうから言っておくが、国木田↓国木田↓谷口↓国木田の順に

喋っている。

「別に、直すのが面倒だからこうしてるだけ」

と適当に答えておくと、

「ほんとにおとこみたーいww」

と谷口が笑う。

そんなにおかしいか、俺は・・・。

性転換ネタ。(後書き)

1話終了。

どうぞ2話も見ていってください。

性転換ネタ。（前書き）

2話目です。

頑張ってみたつもりなので、ぜひ見てください。

性転換ネタ。

谷口と国木田が笑っている中、俺はふと思った。

この世界の俺って、中学の頃荒れてたのか・・・？

「・・・！」

頭の中に何か記憶がよみがえってくる。

俺の知らない、というかこの身体の記憶だろうか。

そこにはこの身体の俺が中学の制服で気だるそうに国木田とその他多数の

女子と話している記憶だった。

なん・・・、だ・・・、これ・・・。

少し頭痛もした。

たぶん、この身体の記憶がよみがえりつつあるのだろう・・・。

「どうしたのキョン子ちゃん？」

国木田が心配して俺に声をかける。

「・・・ああ、大丈夫、なんでもない」

「そう？、ならいいけど。」

今がこの身体の記憶なら、嫌なことがひとつ思い浮かぶ。

俺のものと記憶はどうなる・・・？

嫌な予感がして、俺の頭の中から中学の頃の記憶を探す。

———そんな・・・。

この身体の記憶しか出てこない。

俺の男であった頃の中学の記憶がでてこないのである。

もしかしてこのままこの身体に馴染んでしまえば、俺は俺を忘れてしまうのでは

ないだろうか・・・。

考えると怖くなってくる。

自分が自分じゃなくなるなんて、考えたくなかったさ。

「ちょっと、散歩してくる」

そういつて席を立ち、フラフラと廊下に出て行った。

いつの間にか9組の前である。

少し興味が沸き、古泉を探してみると、想像もしなかったものが視界に映る。

朝比奈さん並の巨乳。

整った顔立ち。

100人に見せれば100人が恋するような女性がいた。

よく見ると、笑みを浮かべている。

簡単に予想はついた。古泉だ、たぶん。

あの某ファーストフード店のCMの店員にも負けない0円スマイルで

笑っている。

古泉（？）がこちらに気づき、こっちに来た。

一瞬驚いたが、まあ逃げるのも何だろうと思い、その場に待ち構える。

「私に何か用？」

・・・？

雰囲気は完全に古泉だが、いつもの皮肉たっぷりの敬語がない。

とりあえず聞いてみた。

「古泉・・・さん？」

古泉は不思議そうに

「そうだけど、どうして？」

どうやらこの世界の古泉は普通にしゃべるらしい。

声は十分大人っぽいがね。

「いや、なんでもない。何かごめんな。」

「・・・？別にいいわよ」

「あなた、名前は？」

「〇〇、下の名前は〇〇。」

「ふーん、仲良くしましょうね。」

「ああ、よろしく。」

会話が途切れると、古泉は授業開始のチャイムが鳴るからと自分の席に戻った。

「俺も急がなきゃな」

何とか間に合った俺は席に着き、頬杖をついて窓の外を眺めた。

運悪く古典だったため、睡眠魔法を放つ国語の教師がやってきた。

俺はその魔法にまんまとかかり、スヤスヤと寝てしまった。

——「・・・子ちゃん」

「・・・ヨン子ちゃん」

「キヨン子ちゃん！」

「！」

ああ、俺は寝ていたのか。

授業が終わり、号令をかける直前に、俺は国木田に起こされた。

幸い先生は気づいてないらしい。サンキュ、国木田。

この日の授業が終わり、昼間だというのに眠そうな俺は鞆に教科書を詰め、

生徒玄関へ足を運んだ。

「はいはい！どいたどいたー☆」

この異常にテンションの高い声は、鶴屋さんか？

当たっていた。髪は短いが間違いなく鶴屋さんだ。

俺の感も捨てたもんじゃないな。

「あれれー新入生かい？今から帰りかい？羨ましいねー☆」

「は、はぁ・・・。」

「そういう鶴屋さんは、このあと何の授業があるんですか？」

また口が滑った。俺が鶴屋さんの名前知るわけなのに・・・。

「次はねー、数学だよ！まいったまいった☆」

・・・どうやら気にしてないらしい。

「そんじゃあバイバイ！また明日ー☆」

と鶴屋さんは階段へ走って行った。

風の如くくっついていうのはこういうことだろう。

さて、帰るか。と靴を履きかえ駅まで向かう。

坂は下りの方がきついというのは本当らしい。

実際今とても辛い・・・。

ようやく駅まで付き、時間が時間だからか空いている電車に乗り、家に帰った。

家に帰って、誰もいなかったが一応ただいまーと一人で言い、部屋に入る。

「はぁ・・・、何か疲れた。」

そうしているうちに、いつの間にか俺は寝てしまった。

性転換ネタ。(後書き)

頑張って3話かいてきますW

性転換ネタ。(前書き)

ちよつと時間がなかったなので短め&雑です。

性転換ネタ。

「――・・・」

俺は寝ていたのだろうか。

目を開けるとそこは俺の部屋だった。

布団を掛けずに寝ていたためか、悪寒がする。

ふと自分の身体に目を向ける。

「やっぱり・・・そうだな・・・。」

いくら期待しても変わるはずはない。

あの自己中な神様の気が変わらない限り。

・・・

中学の頃からの愛用の目覚し時計に目をやると、3時30分というとても微妙な時間に俺は起きていた。

このまま起きているという手もあるんだろうが、俺は残りの時間を睡眠に譲り渡し、一時の快楽を得た。

「・・・くーん」

「キョーンくーん！」

「ん・・・？」

なんだろう、前にこんな感じで起こされたことがある気がする。

「キョンくん！朝だよー☆」

「ああ、今起きるよ。」

何故か俺の頭は冴えていた。

いつも通り洗面台へ向かい弟と顔を洗う。

ふと思いついた。

「もう、戻れないのだろうか。」

「ほえー？」

「ああ、いや。なんでもない」

いかんいかん、ネガティブはいかん。

さて、学校に行くか。

この身体のペースというものを考え、ゆっくり坂を上っていると
そこまできついということもなかった。

だてに閉鎖空間で神様連れまわして走り回ったわけじゃないさ。

・・・関係ない、か。

教室に入ると、やはり整った顔立ちのやや不機嫌な涼宮が席に座っていた。

すこし興味もあつてか、俺は少し話しかけてみようとした。

「な、なあ涼宮。曜日で髪型変えるのは、宇宙人対策か？」

なんてことを言っているんだ俺は。2日で断定したことになってしまった

ではないか。

「・・・いつ気づいた？」

「え、と・・・昨日。」

「そうか、俺は思うんだけどさ、曜日毎にイメージってあるじゃん？」

なんか、この世界のハルヒコは気さくだ。

けっこう話が続く。

「ふーん？でも、男なのに長髪なんて、珍しいな。」

「そうか？」

翌日、涼宮は髪をばっさり切ってきた。

予想はしていたが、可愛いカチューシャもつけている。

思わずにやけていると、岡部がやってきた。

何か知らないがすごく残念な気がする。

そして岡部よ、なぜお前は男のままなんだ。

一限目が終わり、俺は涼宮に

「部活とかはどうなんだ？」

と聞いてみた。

「んー、全部入ってみたけど。面白いものなんて一つもない。全然」

この世界でも「全然」は使うんだな・・・。

「そ、そうか。で、どうするんだ？」

決まっている。このあと涼宮は授業中に――――

・・・あれ・・・？

なんだ・・・思い出せない・・・。

このあとどうなるんだっけ・・・。

畜生、記憶がなくなってきているのか・・・。

「どうしようかなあ・・・。」

予鈴がなり、2限目が始まる。

国語の教師（睡眠属性）が教室に入ってきた。

俺はというと、CDを聞かせられそのままスヤスヤと寝てしまった。

腕で枕を作り、窓際を向いて寝ているという構図である。

その突如、あろうことか涼宮は俺の顔を両手でつかんで自分の方向へ
思いきり引き寄せてきた。

「無かったら、作ればいいんだよ!」

「・・・は!？」

俺と涼宮の顔の距離は10センチといったところだろうか。

「つくるって、何を・・・？」

「部活だよ!部活!」

・・・？

昔こんなことあった気がする・・・。

思い出せない・・・。

まあ、いいか・・・。

「とりあえず、離せ涼宮。」

「?、なんでだよ」

「今は授業中だ。」

先生を含めた1―5の生徒の全視線がこちらに注がれる。

その窓から飛び降りてやろうかと思うくらい恥ずかしかったさ。

「・・・。」

涼宮も納得したのか、俺の顔を離して席に着いた。

次の休み時間、俺は強引に階段の踊り場まで連れていかれた。

「部活を作る。俺に協力しろ！」

「はぁ・・・。」

性転換ネタ。(後書き)

4 話目は部活を作るところです。
是非見ていってくださいねw

性転換ネタ。(前書き)

キョン子が身体に馴染みつつある中、とうとうSOS団完成ですw

性転換ネタ。

「だから、俺は部室を用意するから、お前は学校に提出するあれとかそれとか・・・」

「分かった分かった・・・。」

何故俺が涼宮の部活作りの片棒を担がにやらんのだ。

俺は書類に適当な紹介文を書いて、訳のわからないまま先生に提出していた。

「先生、お前が部活作るなんて思わなかったよ。はっはっは。」

断じて俺じゃないぞ岡部。

涼宮という神様が作るんであって俺が作るわけじゃないんだからな！

なんとか部活の申請も終わり、涼宮に報告しに行くと

「よし、俺も部室は確保した。」

どうせ●●部の部室だろう・・・。

頭の中で芸能人の発言を隠す時のように、俺の言葉が遮られる。

もう、気にするの嫌になってきた。

このまま記憶がなくなっていく・・・のか・・・。

そんな不安をよそに、放課後が訪れると、俺は涼宮に

「こなかったら、死刑だからな！」

と言に残され、

「仕方ない・・・か・・・。」

と、部室へホイホイと、向ってしまったのである。

フラフラ歩いていると、俺の前にはいつの間にか文芸部の部室があった。

「・・・？」

どうして文芸部の前で俺は立ち止まっているのだろうか。

その時、涼宮が勢いよく走ってきた。

「お、お前、よく、ここが、わかったな・・・。」

「今から、お前に、部室、教えに、はあ、行くところ、だったのに・・・・。」

「え・・・？」

俺は文芸部の扉を見直した。

何か懐かしい。

だが全く記憶にない。

もう、頭が痛くなる・・・。

その時、呼吸を整えた涼宮が

「今からここが我々の部室だ。」

と言った。

「我々、って……。俺も部員かよ……。」

「当たり前だろ！というか、お前自分のこと俺って言ってるのか？」

面倒だから適当に

「どうでもいいだろ……。」

と言っておいた。

涼宮が文芸部の部室の扉を開けると、そこには本棚と長机、本を読む人、パイプ椅子

があった。

ん……？

本を読む人……。って、

「涼宮……。あちらさんは部員か……？」

「いや、文芸部員だ。」

「じゃあ文芸部なのか？」

「そんなわけないだろ！部室貰っただけだよ！」

なんということだ。こいつは人さまの部室を自分のものにしようとしている。

「長門有希」

本を読んでいた、ハルヒコ並に背の高い美青年が自己紹介をした。

「長門さん・・・とやら、こいつはこの部室を勝手に使おうとしているぞ?」

「別にいい」

どうやら強奪したわけじゃなさそうだ・・・。

「そのうち、追い出されるかもしれないぞ?」

「いい」

本を読んだままそう答える長門という青年。

「文芸部はもともと、部員が少ないから廃部寸前なんだとよ。」

「こいつは本を読めればそれでいい、ってここを貸してくれたんだ。」

そうとう本が好きらしい。

しかし涼宮、文芸部で何をする気なんだ？

「で、どういう部活を作るの・・・？」

「フッ、聞いて驚け！」

何故かごくりと息をのんで聞いている俺。

「世界の不思議を追い求める生徒の団！名づけて、SOS団だ！」

「・・・。」

SOS団、か。前の俺も苦勞したもんだ。

なんたって————

やっぱり・・・か・・・。

「ん？どしたキョン」

「ああ、なんでもない・・・って！」

おい涼宮。キョンってなんだキョンって。誰に聞いた。

「谷口から聞いた。」

あの野郎絶対後で嫌がらせしてやる……。

「でさ、部員集めなんだが、あと二人なんだ。」

「適当なやつでも連れてくればいいんじゃないのか……？」

「それじゃあだめだ！面白くない！」

「というわけで、2年生のフロアまで行って調達してきた部員を読
んであるんだけど」

「……？」

ちょうどいいタイミングで、2年の名札を付けたやや小さい男の子
がやってきた。

「あ……あのう……。」

えー、皆の衆。はつきり言おう。

弟くらいの髪。

女装させたらばれることはないであろう童顔。

そう、シヨタがやってきたのである。

「ははっ、すげえだろ！俺がみつけたんだぜ！」

誇らしげに言ってくるハルヒコ。

「あのう・・・僕の・・・返してください・・・。」

ん？返してくださいってなんだ。涼宮、お前まさか・・・。

「ああ、ほらよ。生徒手帳。」

「お前・・・まさか、生徒手帳で脅してここまで来させたのか・・・？」

「よく分かったなキョーンw」

・・・

真性のアホだこいつ・・・。

「この人は朝比奈みつる。2年フロアで見つけたから誘拐してきたんだ。」

どうやら本気で誘拐したらしい・・・。

「さて、あと1人だな！」

もう部員にしてやがる。

ハルヒは部員を探してくると部室を飛んで行った。

「えっと・・・朝比奈さん。いいんですか？こんな部活入れられて。」

「いいんです・・・。」

そんな涙目で言われても・・・。

「あ、あの・・・僕・・・お茶入れますね・・・。」

「え、ああ、いいんですか？」

「はいw僕、そういうの得意なんですよ。」

これはまた笑顔が可愛い。

男だというのがもったいないくらいだ。

・・・男・・・か。

そうだった・・・。俺は男だったんだよな・・・。

意識していないと、忘れそうで・・・何か怖い・・・。

いい具合に入れられたお茶が俺と本を読んでいる長門のもとに運ばれる。

一口含んでみると、それは安いお茶にはとても思えないくらいおいしかった。

「どうですかあ？」

「すごくおいしいですよ。」

「ありがとうw」

ああ、癒される笑顔だ。

そうこうしていると、部活終了時刻になり、涼宮が飛んできた。

「今日はおしまい！解散！」

帰り道、俺は近くのスーパーで夜ごはんの材料を買いに行った。

今日は母親が留守なため、俺がご飯を作るはめになったのだ。

早く帰らなきゃな　と思い急いで帰る。

家に着き扉を開けると、弟が猛突進してきた。

「キョーンくーん！おーそーいー！」

「ああ、ごめんごめん。」

抱きついてくる弟をなんとか引きはがしてキッチンに向かう。

しかし、料理なんて出来るのだろうか。

キッチンに立った瞬間、俺は信じがたい感覚を得た。

なんと、作り方が分かるのである。

適当に買ってきた食材で何を作ろうか、頭に思い浮かんでくる。

そして、

――・・・。

また、この身体の記憶が頭に湧いてきた。

この世界の俺は料理もできたんだな・・・。

弟がだだをこねるので、急いで作ったものはプレーンオムレツだった。

自分でつくって何だが、とても美味しいと思えた。

性転換ネタ。(後書き)

可愛らしさを出すためとはいえ、朝比奈さんの小文字乱用は自分でもどうかと思います・・・。
今度から少し少なくしますね・・・。

性転換ネタ。(前書き)

SOS団全員集合！

古泉との会話が進展していきます。

性転換ネタ。

弟とプレーンオムレツを食べ終わり、風呂に入ることにした。

この身体だといろいろな抵抗もあるが、入らないわけにはいかない。

風呂場に入ると、例の如く記憶が少し沸いてきた。

頭痛も治まってきた気がする。

一応腰にタオルを巻いて風呂に入る。

断じて俺は自分の体で興奮するような変態ではない。

「――・・・。」

湯船につかると、頭が冴えてくる。

そして俺はこれからについて少し考えてみた。

あの日、俺が女になっちまった日……。なにかあっただろうか。
ぼんやりと出てはするが、鮮明に思い出せない。

自分がもとはどんな顔だったかすら分らない。

もちろん、SOS団部員の顔に至っても記憶があいまいである。

適当に湯船から上がり、シャワーを上段にひっかけて立ったまま
お湯を

浴びる。

「はぁ……。。」

精一杯考えて思いついたことは、あの日俺は部室であいつと喧嘩し
たこと。

あいつが不機嫌そうに帰って行った記憶が微かに残ってる。

それが原因なのだろうか……。

俺は横にあった椅子にすわり、自分のものとは思えないくらい質の

いい髪を洗う。

当然洗い方もわかる。

柑橘系のいいにおいがするシャンプーで頭を丁寧に洗っていると、

プルルルル

「はーい☆」

・・・電話がなったようだ。

しばらくすると弟がやってきて、

「キョンくん、お母さん明日も仕事だってえー・・・」

弟が残念そうにつぶやく

俺はそうかと弟の頭を撫で、少し目を瞑りながら自分の体を洗った。

風呂からあがると、妹が待ってましたとばかりに風呂に入って行った。

汗でもかいたのだろう。

俺は適当に顔を洗って、自分の部屋に戻り机に向かっていた。

無論、宿題をかたずけるためである。

いくらおれでも留年はしたくない。

とりあえず・・・、と広げた教科書をみて俺は絶句した。

「問題が分かる・・・？」

不思議なことに公式や文法、その他もろもろの知識が頭にあった。

どうやらこの世界の俺はそこそこ勉強していたらしい。

サンキュ！俺！

調子よく宿題を片した俺は、弟の様子を見にリビングへ向かった。

弟の髪はまだ湿っていて、ほかほかしていた。

「風邪ひくぞ」

と、俺はタオルで弟の頭を拭いてやる。

弟が気持ちよさそうに、

「えへへー☆」

などというもんだから、俺も少し微笑んで弟の髪を乾かした。

そのあと弟とテレビを見ていると、時間はとっくに10時を過ぎていた。

俺は弟を部屋に連れていき、自分の部屋に戻ってスヤスヤと眠った。

翌朝、これまたいつも通りに何も塗らないパンを食べ、この身体のペースで坂を登り、

学校で涼宮と訳の分からない会話をした。

これが俺の日常になりつつある・・・。

久しぶりにまともに授業を受けると、以外と内容もよく分かった。

つくづくこの身体に感謝する。

放課後になり、仕方なくトボトボと部室へ向かうと、部室には朝比奈さんと

本を読んだ長門がいた。

「あ、キョン子さん。お茶飲みます？」

「ありがとうございます。」

朝比奈さんすら名前で呼んでくれないんだな・・・。

俺は”キョン”の呪縛から逃れられないのか。

「そういえば、涼宮さんは？」

「あいつなら、部員探しとかでどこかに行っていますよ。」

今度は誰を連れてくるんだろうねまったく・・・。

ちょうどその時、

「ヘイヘーイ！お前ら！」

大きな声を出しながら涼宮が部室に入ってきた。

「部員ゲットだぜ！」

またしても拉致だろうか。

今度ばかりは止めようと思っていたが・・・

「古泉一姫です、よろしく」

涼宮の後ろから、えらい美人が出てきた。

というか、この人とは一度話したことがある・・・。

まてよ・・・？もっと前にもなにかあった気が・・・。

ああもう！またこれかよ！思い出せねー！

俺が頭の中で混乱していると、

「入るのは別にいいんだけど、何をする部活なの？」

と、その美人が聞いてきた。

涼宮が自信たっぷりの態度で言い放つ。

「ここはな、人間じゃない、そう、宇宙人や未来人や超能力者を捕まえて、一緒に

遊ぶ部活だ！名前はSOS団。かっこいいだろ？」

「へえ・・・」

古泉という美人は部室を見渡し、一瞬笑みを浮かべてから

「分かったよー。キョン子ちゃんもいるし、入るよ。」

と言った。

はあ・・・、もはや俺はキョンが本名になりつつあるのか・・・。

それに、何で俺がいるから入るんだろうか。

「まあなにはともあれ、部員もそろったし、活動を始めろぞ！」

涼宮が嬉しそうに言う。

「活動ってなんだよ。」

不満そうに俺が聞いてやると、

「そうだなー、とりあえず、不思議を散策することだ！」

「・・・。」

見つけてこないと死刑だからな！と言い残しハルヒコはどこかに走り去ってしまった。

俺はというと、古泉さんに誘われて校内を散策した。

「私ね、あなたに言いたいことがあるの。」

「・・・はい？」

どうせ自分は超能力者だーとかそういうことだろう。

・・・あれ

何で俺、こんなこと覚えてるんだ？

古泉の顔は思い出せないが、こいつが超能力者だってことは知って

る。

朝比奈さんや長門もなんとなく覚えてる。

えーと確か、朝比奈さんが未来人で長門が宇宙人だっけか・・・

「あのね、実はわたし————」

「超能力者？」

ちよっと聞いてみた。

自分だけ悩むよりこっちの方が断然いい。

「・・・え？」

哑然とした古泉を見て、俺は朝比奈さんや長門にも言ってみようかと考えてみた。

「どうしてそれを・・・？」

そう聞かれたので俺は、古泉に俺は男だったこと。ハルヒコやお前とは前の世界で

会っていること。などなどいろいろ話してやった。

正直こんなに口が開いたのは久しぶりだ。

「そう・・・。」

古泉が懐かしいしぐさで考えこむ。

そのあと古泉は”機関”とやらに電話をし、今の状態について調べていた。

——古泉曰く、俺のもといた世界はパラレルワールドらしい。

この世界と並行して枝分かれする、性格や性別が異なる世界。

おそらく俺の世界のハルヒコが性転換を望んでこの世界ができたのだろう。

「つまり、私はあなたの世界では皮肉たっぷりの敬語野郎だったってこと？」

「そうなるな。」

納得のいかない顔をした古泉を連れて、俺は部室に戻った。

謎集めをするのを忘れて、団長のもとに帰ってしまったのである・・・。

性転換ネタ。(後書き)

5話目は朝比奈さんと長門に話しかける感じで言ってみます。是非見てくださーいw

性転換ネタ。（前書き）

6話目ですw

と言ってもまだ閲覧者は少ないんですがね・・・。
もっと皆が見てくれるように、精一杯頑張ります。

性転換ネタ。

このとき俺は忘れていたよ。

我らが団長様のあの言葉をな。

———「不思議を見つけてこなかったら死刑だからな!」———

そんなことをすっかり忘れて古泉と部室に戻る。

文芸部の扉を開けると、そこにはニヤニヤしたハルヒコが座っていた。
た。

当然後ろに長門と朝比奈さんもいる。

「何か見つかったか？」

この言葉で俺は思い出した。

そうだった。謎の散策だったな・・・。

「あ、えつとその・・・」

「どうなんだよ？」

言葉が詰まる。

この時に正直に謝ってればよかった。

「見つけてこなかったんだな!？」

怒った口調でハルヒコがにらんでくる。

この態度に俺は何故かイラッときた。

俺の意識がむかついたわけじゃない。俺の身体が反応したのだ。

「そんなに不思議に会いたかったら、自分で見つけたらどうだ。」

気だるい口調で淡々と言う。

ハルヒコが少し絶句して、一度うつむいたかと思えば、

「今日は解散・・・」

と言ってどこかにいってしまった。

あんなこと言うつもりはなかったけど、何故か謝る気もしてこない。
むしろハルヒコには、これくらいの灸を据えたほうがいいのかも
れない。

そう思っていると、内心予想はしていたが古泉の携帯が鳴り、

古泉は”バイト”と言って部室を後にした。

俺は朝比奈さんと長門に適当に訳をつけて今日のところは帰っ
てもらった。

「はぁ・・・。」

俺は何をしているんだろう。

元の世界に戻るには、ハルヒコの機嫌がカギだというのに。

「心配ない。涼宮ハルヒコは君のことを恨んではない。むしろ、自分を責めている。」

無機質な声で長門が俺に話しかけてくる。

今日言うつもりはなかったが、いい機会だと思い俺は長門のことと俺のことを話す。

長門は少し考え、結果的に古泉と同じようなことを俺に告げた。

「貴方の話が本当なら、情報統合思念体もまとめて変えられていることになる。」

「データから推測すると、この世界は涼宮ハルヒコのとてつもないほど大きい感情

からつくられたもの。僕ではどうにもできない。」

元の世界の神様は相当怒っていたらしい。

「心配しなくていい。」

「え？」

「涼宮ハルヒコが原因だということは既に分かっている。情報統合思念体はこの事を」

全力で調査するはず。そのうち打開策が見つかる。」

長門にしては曖昧な発言だった。

そのうちなんて長門の口から初めて聞いた気がする。

「まあ、ありがとな。」

お礼を言ってみると、ミリ単位だが、長門がうなずいた気がした。

気がつけば6時30分を過ぎていた。

急がなきゃ弟が泣いてしまう。

長門も本を本棚に戻し、帰り支度をしていた。

「じゃあな。」

と言って俺は部屋を後にする。

ぎりぎりです電車に間に合い、家まで急ぐ。

「はあ、はあ、・・・。」

やっとのことで家について、「ただいま」と言うと、目の前に信じられない

光景が映った。

なんと、涼宮ハルヒコが俺の弟を抱いて玄関にやってきたのである・・・。

性転換ネタ。(後書き)

ハルヒコが家に――キョん子の反応はいかに！

7話目もみてねーw

性転換ネタ。(前書き)

7話目です。キョン子が少し乙女になっていますが、気にしないでください。

性転換ネタ。

「な．．．．．」

何故だ。

何故俺の家にハルヒコがいるんだ。

「遅かったな．．．。」

どうやら、部室を飛び出してから俺の家にきて、ずっと待っていたらしい。

「何で．．．俺の家に？」

「．．．謝りたかったから．．．」

ハルヒコがそう小さくつぶやいたのを聞いて、俺は少し溜息をつい

た。

といってもあきれたわけじゃなく、顔も少し微笑んだ感じで溜息をついたのである。

この世界のハルヒコはなかなか素直らしい。

ぐるるるるるる・・・

「・・・」

「飯・・・食うか・・・？」

——「はぁ・・・」

今度は本当にため息である。

人が少し感心してご飯を御馳走してやろうかと提案してやったのに・

「うまいのつくれよな！」

なんて普通言わないよな……。

どっちの世界でもハルヒコは横暴らしい。

「さて、何を作ってやろうか……。」

とりあえず俺は冷蔵庫をあけ、豚肉とキャベツともやしを手に取り、炒めた。

「そういえば……、どうしてあいつ俺の家を知ってるんだろうか。」

無論この世界のハルヒコには俺の家など教えていない。

まだSOS団作ったばかりだからな……。

そうこう考えてるうちに肉野菜炒めが出来上がり、俺はリビングに向かう。

断じて言っておこう。俺はハルヒコに見せつけるためにこんなことをしたわけじゃないと。

その時俺がエプロン姿だったのは、まぎれもなく事故だったと。

——「涼宮ー、ご飯できたけど。食べるかー？」

「ああ、ちゃんとうまいも・・・ん・・・」

・・・

なんだ、ハルヒコ。何かおかしいか。

「あ！いや、何ー作っただ？」

「？ ああ、肉野菜炒め・・・なんだけど・・・なんだ？」

「なんでもない！なんでもない！」

「そ、そうか・・・」

料理を運んできて初めて分かったよ。

俺は今エプロン姿だったと。

何故か知らんが猛烈に恥ずかしくなった。またしても俺がじゃなく、身体が。

「で・・・お前、どうして俺の家知ってるんだ？」

「ああ、先生から聞いたんだ。」

どうせこいつのことだから、脅して聞いたんだろう。

哀れ、北高教師。

——涼宮の口に俺が作った料理が運ばれていく。

何故か知らんが少し意識してしまう・・・。

ああもう！何考えてるんだ俺は！

なんだろう・・・、最近俺の意志じゃない俺がいる気がする。

この身体のもとの意志・・・なんだろうか・・・。

「キョーンくーん、お風呂はいろー☆」

「ふえっ？」

間抜けな返事をしてしまった。

「あ、ああ・・・でも今は・・・涼宮もいるし・・・。」

俺は涼宮の方を少し見ると、涼宮は少し赤面して、

「べ、別に・・・俺は構わない・・・けど・・・。」

な、何を言ってるんだ涼宮！やめてくれ、俺まで変になっちまう・・・。

なんだなんだなんなんだ・・・、こんなフラグ立っちゃいけない・・・。

「ねーキョーンくーん、汗かいちゃったからいろー？」

弟よ・・・、少し・・・黙っててくれ・・・。

「な、なあ涼宮、俺の弟、ゲーム好きなんだ・・・、遊んでやってくれ・・・。」

「ゲームウー？やりたーい☆」

「おう！ゲームなら任せとけ！」

はあ・・・、何とかなったか・・・。

しかし、なんなんだこの身体。

あの過剰反応はどうかと思うぞ・・・。

これから先ああいうことが繰り返されるならたまったもんじゃない。

俺は今朝教えてもらった古泉の携帯電話に電話をし、何とかならぬいか

頼んでみた。

すると古泉はフツ、と笑って、

「別にそのままでいいじゃない。涼宮君との進展があれば何とかなるかもよ？」

と言ってきやがった。

やはりどの世界でもこいつはむかつくやつだ。

「さっき閉鎖空間も自主的におさまったんだよね。」

「え?」

「涼宮さんの機嫌が良くなったってこと。」

あいつの機嫌が・・・?

「あ、それと古泉。」

もう一つ聞きたいことがあった。

この身体の感情の昂り方についてだ。

詳しく話すと古泉は

「たぶん、この世界で貴方はと涼宮さんのことを——」

ブチッ

電話を切った。

もうこれ以上聞きたくないからだ。

どういうことだ……。この世界ではって、この世界では俺の意識になってから

涼宮に出会ったんじゃないのか？

もう訳が分からない……。。

「おうキョン子ー、風呂貰ったぞー。」

……は？

「風呂って、え？」

かなりキョドってる俺に涼宮は

「そうだよ、弟ちゃんがどうしてもって言うから一緒に入ったんだよ。」

・
・
・

「なあ・・・、涼宮・・・。」

「ん？」

「そろそろ・・・帰ってくれないか・・・？」

「・・・」

何を言ってるんだろう、俺は。

もう早く涼宮から離れたい。冷静になって整理したい。この現状を。

「そ、そうだ・・・よな・・・。こんな夜中に、迷惑・・・だったよな・・・。」

「・・・。」

気まづくなってしまった。

こんなことをするために、俺は飯まで御馳走してあげたわけじゃない。

俺は
・
・
・
○

「湯冷めしちゃうから・・・、今すぐになんて言わないよ・・・。」

「鍵……置いてくからさ、ポストに置いておいてくれ……。」

———そうして、気づいたら涼宮は帰っていた。

そして次の日、俺は学校を休んでしまった。

性転換ネタ。(後書き)

もう原作からかけ離れていますね・・・。
3次4次創作と言ったところでしょうか。

8話目も是非見てください。

性転換ネタ。(前書き)

いつの間にかフラグが立ってしまったので進めていこうと思います。
というわけで8話目の始まりです！

性転換ネタ。

・
・
・
・
・

「ん・・・」

ここは、何だ？

一寸先まで真っ暗闇の光景が目に入る。

「ああ、これは夢だろう。」

(・・・なさいよ！)

なんだ？向こうから何か聞こえてくる・・・。

（こらー！キョ●！逃げるなー！）

（まで！ハル●、落ちつけって！）

男のこと・・・女の子が・・・いる・・・。

これは・・・なんなんだ・・・？

「っは・・・！」

俺は飛び起きた。

「なんだ・・・、やっぱり夢か・・・。」

カーテンの隙間から入る日差しが激しい。

おそらく昼間だろう、俺は学校をサボってしまった。

「な、なんだハルヒコか、びっくりしたじゃないか！」

と、俺が言うのも何だが、俺らしくない感じで言ってしまった。

「何で学校来ないんだよ！さっきから何回電話したと思う！」

俺は携帯の履歴を見ると、着信履歴が50件を超えていた。

一分間に5回はかけているペースだ。

「というより、その携帯古泉のじゃないのか？」

今度は淡々と言えた。

「うるさい！いいからさっさと学校に来い！来なかったら、死刑だからな！」

ブチッ

一方的な脅迫電話を受けた俺は死刑にされてはたまらんと着替えを急ぐ。

「・・・ところで、あの夢はなんだったんだろうか・・・。」

「何か・・・、懐かしい気がしたが・・・。」

考えてても仕方ない、と頭を横に振り、いつものように制服を着て、大きめの

カーディガンを身につけて学校へ急ぐ。

そういえば、俺がカーディガンをつけている理由、だが。

特にというわけではないが、自分で制服を着て学校に行くなどと言う羞恥心を乗り

越えるべくつけたのだ。別に寒いとかそういう可愛らしい意味は込められていない。

さて、準備も整ったし、学校に行くか。

しかし、昼間に制服を着て道を歩くというのも、なかなか新鮮な感覚だ。

そう思ってトボトボ学校を目指していると、いつの間にか学校の校門だった。

ちょっと早すぎる気もしたが、大方涼宮が早く来いとも思ってるんだろう。

教室に入るなり俺は涼宮に睨まれ、まさに蛇に睨まれた蛙のようになっていた。

「なんで遅刻したんだよ。」

察してくれよ涼宮。

あんなことがあってホイホイ学校へ行けると思うのか・・・？

「ああ・・・、ちょっと風邪気味でな・・・。」

「風邪！？何で言わなかったんだよ！」

ああもう、面倒なやつだ・・・。

とっさに言った言い訳も台無しだぜ。

「ああ、悪い・・・怒鳴っちまって・・・。」

「良いよ別に・・・。」

そのあとの授業はとても気まずかった。

閉鎖空間もそろそろ発生してしまったかもしれない。

すると空気の読めないやつが一人

「ちょっとキョン子！どうしたの？涼宮君と仲WAWAWAWA悪いじゃないの！」

「・・・。」

正直、今は誰とも話したくない。

「関係ないだろ。」

谷口がオロオロしている。

ああもう、何をしているんだ俺は・・・。

「悪い谷口、今は黙っててくれ。」

そういうと谷口は

「怒ってないんだね？」

と涙ぐんで聞いてくるもんだから、

「別に怒ってないさ。」

と言ってやった。

俺が谷口に気を使うなんてもとの世界じゃ考えられないことだ。

・・・もとの世界・・・。

そうだ、俺はもともと違う世界の俺じゃないか。

すっかり忘れていた。

よくよく思えば、今朝の夢だっって見覚えがある。

———まさか

ガラッ

岡部が入ってきた。

どうやら休み時間が終わったらしい。

どいつもこいつも空気の読めないやつばかりだ。

授業が終わり、俺は部室に向かう。

涼宮はすでになくなっていた。

古泉は当然と言っちゃ悪いが”バイト”・・・もとい神人駆除で来ていない。

朝比奈さんが機嫌の悪そうな俺を気遣ってお茶を出してくれた。

「ああ、ありがとうございます。」

「キョン子ちゃん、どうかしたの？」

正直聞かれたくなかったが、谷口のような処置をとるわけにもいかない。

俺は少し話してみた。

長門もそれとなく聞いていたと思う。

「ふうん……。」

朝比奈さんが顔をしかめる。

「キョン子ちゃん、それはたぶん、キョン子ちゃんが涼宮さんのことを受け入れて

ないからだと思います。」

「俺が……涼宮を……？」

受け入れる・・・か。確かに、俺は心のどこかでハルヒコのことを拒絶していたかも知れない。

しれない。

「涼宮さんも、嫌がらせしようとしてるわけじゃないと思うの。優しくしようとして、

からぶっちゃってるだけなんだと思う。」

「だから、キョン子ちゃんが受け入れてあげないと、涼宮さんも報われないんですよ。」

俺は・・・、少しうつむいて、考え込んだ。

確かにそうかもしれない、しかし、たとえ受け入れたとしてそれからどうなる。

というか、俺にとってハルヒコってなんなんだ・・・？

涼宮は涼宮であって涼宮でしかない、そんなデイトロジーでごまかすつもりはない、

ないが。・・・決定的結論を・・・俺は持ち合わせていない・・・。

少しの沈黙が訪れ、突然長門が本を閉じ、俺の前に立つ。

「涼宮ハルヒコが精神が不安定になって、閉鎖空間が多数出現している。」

「え．．．？」

「涼宮ハルヒコは今この学校を出て1，2キロメートル先の空き車庫にいる。」

そんなところに．．．っていうか今雨降ってるんじゃ．．．。

「キョン子ちゃん、早くいってあげて。涼宮さんを止められるのは、キョン子ちゃん

だけだと思うの。」

どうやら、古泉から俺の話を聞いたらしく、朝比奈さんも自分の素で話してきた。

俺は二人に礼を言い、部室を飛び出して雨の中ハルヒコを探しに出た。

性転換ネタ。(後書き)

長門のデレだとか一姫の百合だとかこの際投げ出してハルヒコ一直線にしてしまえと思い書いてしまったものです。そういう要素は物語の終わりらへんに少し入れようと思っていきますので、それまでどうぞお付き合ってくださいw

更新の都合について。(前書き)

こんなんですいません・・・。

更新の都合について。

どうも、れみいです。

こんな一般人の日本語おかしいねーの小説を見ていただいてとても感謝

しております。

本当は9話を執筆していたんですが、ノートパソコンのタッチパネルに手が当たって

そのままバックスペースを押してしまうという事故が8回ほど、しかもある程度書き

終えてからという、とても萎える事故が起きてしまいました。

もともとこれから講習だったので急いでいたんですが、もう時間もないため、こんな

言い訳分をかいております。

ゴールデンウィーク中には復活するつもりです。

9話目の予告・・・、といきましょいか

そこでキヨ子乙女發動で一氣に關係が進展……するかも……

是非見てくださいね！。

(文字稼ぎ。)

600字ないとだめらしいんです。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

更新の都合について。(後書き)

明日急いで本編書きますね；；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7696g/>

非常識な日常の始まり

2010年10月12日02時12分発行